新しい公共の場づくりのためのモデル事業　自己評価シート

整理番号

事業名	東日本大震災による福島県からおもに東京多摩地区に避難している母子家庭が地域に親しみ、ともに助け合う社会を築くための支援事業

評価項目

No	項目	記入欄 内容が分かるように、200 字以上～300 字以内で簡潔にまとめて記載してください。	自己採点
1	成果目標	・避難母子支援市民ボランティア養成研修講座について 7月の講座は47名の申込みがあり、第1回26名、2回32名、3回31名、4回24名で平均出席者数27名で目標数値20名は達成。また、アンケート等から参加者は４回の研修を通して、震災の風化を解消するひとりとなること、この事業において或いはそれぞれの地域や団体においてその担い手となることの意識がある程度根付いたと評価している。 延べ50名が場づくりのボランティアとして参加。 ・避難母子が安心して集える場づくり（福福カフェ）について 3月末現在24回実施し、参加者数の平均は4.8組で目標の2組はクリアしている。江戸川区や葛飾区、昭島市、練馬区、中野区、武蔵野市等都内各所からの参加があり、参加者アンケートから「東京に避難している母子家庭の集まりに参加したのは初めて。孤立した状態だった」「こうした会を探していた。やっと参加できた。立場は違っても、お互いを認め合い気持ちを吐き出せる場であって欲しい」「頑張って来て良かった。一歩が踏み出せそう」など「避難母子は安心し、仲間や支援者との出会いそれぞれの地域で一歩を踏み出す勇気を持ち、生きていく意欲持つことにつなげる」という目的は、ある程度達成できてきているとの認識である。	4
2	市民性	避難母子が安心して集える場を提供することにより地域を超えての交流の機会となり、それぞれの地域における市民としての意識の向上につながった。 また、避難母子支援市民ボランティア養成研修講座を通して避難母子の心のケアについて、被災者に対する支援方法について等学ぶことにより市民としての意識の向上を図り、市民の震災の風化についての予防にも努めたことへの評価が得られた。 また、避難母子が安心して集える場「福福カフェ」への参加を通して、市民ボランティアとしての意識を向上させることにつながった。	3
3	波及効果	地域は武蔵野市とその周辺の多摩地域からの参加を想定していたが、研修講座には横浜市や町田市、立川市、日野市、世田谷区、杉並区など都内各地域から集まった。福福カフェ（場づくり）には、東京都内の江戸川区や葛飾区から昭島市まで遠方にも関わらず参加者を得た。	4

		参加者意見からは「東京に避難している母子家庭の集まりに参加したのは初めて。孤立した状態だった。」、「こうした会を探していた。やっと参加できた。立場は違っても、お互いを認め合い気持ちを吐き出せる場であって欲しい。」「頑張って来て良かった。一歩がふみだせそう。」など、求められている事業であることが伺える。また、参加を通して互いの気持ちを出し合い、情報交換する中で、孤立感や孤独感をできるだけ少なくし、つながっていくことが生まれており、より多くの自治体で同様の取組みが期待される。避難母子支援市民ボランティア養成講座実施により市民の震災への理解が深まり風化防止解消につながった。参加した市民ボランティアが研修や避難母子との関わりを通して市民としての理解をより一層深めていった。避難母子が安心して集える場づくりを通して各地域に点在する避難母子が地域を超えて横につながり、孤立感や孤独感をできるだけ少なくしつながっていく一助となった。3 月には参加者が進行役(ナビゲーター講師)を務めたり、次のステップに移る参加者も出た。協議体を構成する団体間が自らの地域の問題を協働による問題解決への取組みにより、事業終了後の連携にもつなげていく動きが生まれた。	
4	継続性	福島県から母子避難している人たちへの支援は、これから中長期に渡ることが予想される。いつ福島に戻れるのかという先の見えない避難生活の中、特に母子避難家庭における母親の悩みは深く、孤立感や孤独感や虐待や自身の心の病気を防止対策する事業の必要性は今後益々重要視されていくことが予想される。2013年3月11日で2年が経ち、生活形態、家族構成の変化の中、母子が一緒に楽しみ、心を開き、安心して幸せなひとときを過ごせる場の提供はそれぞれの地域において益々重要になってくるだろう。参加者の緊張感を緩め場を和ませるナビゲーター起用、回数の検討を重ね事業の継続を進めていく。	4
5	マルチステークホルダー・プロセス	武蔵野市、武蔵野市民社会福祉協議会、東京ＹＷＣＡ３者のステークホルダーと更に多様な担い手として大学教授等の有識経験者、地域子育てグループの代表とで運営協議会を結成し、年３回の協議を行い予算・企画・広報等について十分な意見交換を行い進めてきた。その過程においては立場の違う団体や個人が参加することで、互いに意見交換の中で学びあい、成長しあい協力しあい、それぞれの役割を果たしていった。行政は官として安定感のある立場で事業に関与し、民である武蔵野市民社会福祉協議会の持つ情報量は事業を支え、東京ＹＷＣＡの企画力、フットワークの良さとマンパワーにより柔軟に問題解決を図り進めていった。	4

新しい公共の場づくりのためのモデル事業　自己評価シート

合計点

１５

ランク

A